
一人ぼっち of the final

ぶーとんとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人ぼっち of the final

【Nコード】

N2717L

【作者名】

ぶーとんとん

【あらすじ】

雄大の死から12年…
立派な社会人になった卓也たちの
ちよっと大人なリアル話。

CHAYACTER (2の分も含まれているから見てください)

NO 1 杉原卓也 (25)

結局2年進みまして。グツとくるセリフをよく言う心が優しすぎる青年。サラリーマンというか、会社員であって、いたって普通の青年。

ちなみに、ヤドちゃんはご臨終となり、カリちゃんを飼っている。
(結果的にはヤドカリ)

NO 2 滝川愛菜 (25)

前回のみくるの次に可愛いと言われる少女。卓也と職業が同じ、会社も同じ。

勉強、仕事、スポーツ何でも任せとけ！なスーパーガール。

NO 3 森定咲 (25)

雄大の文句を言っていたが卓也に殴られ、懲りた少女。
夜の恐ろしい事件に遭遇してしまう。

NO 4 岡見龍介 (30)

仕事の意欲も高く、優秀な部員。
卓也とは飲み友達なもの。

くらいです。

ここからは2のキャラです

川田麗華（24）

よく冷たいことを言うし、ハメを外すこともある。
でも、人への甘え方が可愛くて、良い。

石塚健太（41）

愚痴が多い。部下の悩み相談はしっかり聞いてくれるが。

後藤敦（23）

仕事一筋！怒りやすい。

上巻 〱 真夜中の連続殺人〱

「杉原君、しっかりここの原稿まとめていくれないと困るんだね。」

「はい。」

「何だそのマヌケっぷりは！いい加減にしないと、クビにするぞ！」

「あああ、はい、やります、やりますよ！」

杉原は「クビ」この2文字に弱い。なんたってこの仕事見つけるのにどれだけ手がかかったことか。

杉原卓也というこの青年は椅子に戻った。

パソコンのマウスを手に取り、行を選択した。そしてササツとキーボードで文字を打ち込んだ。

仕事への意欲は低いものの、キーボードのタッチタイピングはこの仕事一速い男である。

「まったく、最近の若者は…」

部長はそう言いながらタバコに火をつけた。いつものことだ。俺が文字の間違いや提出日を少しでも

過ぎた場合は必ずこの言葉を言う。というかそもそも事務所でタバコをスパスパ吸って良いものなのか。

火災報知器が作動する寸前ではないか。

最近は喫煙ルームなどがあり、タバコの吸う場所は限られている。

「アンタ、またまとめきつてないの？繰り返してたら、クビになるよ。」

滝川愛菜と言う少女はそう言った。

「分あってるよ」

俺はそう返した。ここ最近必ずこの会話がある。

しばらくして…

「この書類、まとめ終わったら帰してやる。」

「あい。」

仕事の呑み込みは速い。しかし、心の中ではめんどくせの連呼中である。

「よろしい。」

俺はやっと帰された。外はもう真っ暗だ。

帰りは歩いてでもいけるほどの距離に会社がある。

そして行きつけの自販機により、ブラックコーヒーを買う。

俺は無糖じゃないと逆に飲めないんだ。

「あ、卓也。」

その先にいたのは咲。雄大文句グループに所属(?)していた少女

である。

今ではすっかり大人しくなってしまった。顔も良いので正直、いいなとは思っていた。

でも愛菜の方がいいので…冷たい態度をとってしまふ。というか、自分で意識してとっちゃう。

「な…なんだ。お前かよ。なんか用か。」

この通り冷たい態度を取るのだ。

「いや、別に。」

「なんだよ…。じゃあな…」

俺は無理矢理スルーするようにその場を通り過ぎた。

（なんだよ、あいつ。突然話しかけてきて…）

俺は家に着いて、椅子に座った。ふう、と一息ついて冷蔵庫をあさり缶ビールを取り出した。

そして再び椅子に座り缶ビールの缶を開けてビールを一口飲んだ。

（俺ももう、親父だな）

そして、テレビのリモコンを手に取った。

「ピッ」

「”現在指名手配中の大木康利。通称、真夜中の連続殺人犯。4人以上が犠牲になっており、

死刑相当の殺人鬼です。見かけた方はすぐに、警察に通報してください。”

最近噂になっている『真夜中の連続殺人犯』。それはそれはすでに2年間逃亡し続けた男である。

連続殺人鬼は今、どこにいるのか。そして、卓也の運命は！？（↑大げさ）

一人ぼっち of the final 上巻 ↓ 真夜中の連続殺人

翌日、朝。俺はベットからおきて、顔を洗い、パンをくわえた。
そして、雄大、俺、愛菜の写真に行つてきますと言い、家を出た。

「おお、今日はなかなかやるな。」

部長に久しぶりに褒められた。さあ、久しぶりに褒められた記念として、飲みにも行こうか。

俺は仕事が終わった後、同僚の龍介を誘った。

午後6時、居酒屋てんてん。

「いやいや、お疲れさん。」

俺はおちよこに入っている熱燗をクイツと飲み干した。

「なあ、お前って、幼馴染とかいる？」

その質問に俺は答えるかどうか迷った。

「まあ、いるけどね。愛菜とか…」

俺はそこで言葉が止まってしまった。

「愛菜とか？」

「いや、…もう一人は中学のとき、死んじゃった。」

答えようか答え無いか迷ったが、つい口からポロツと出てきてしまった。

「そうか…。それは残念だったな…。」

そんな感じで話をしていくうちに時刻は10時になっていた。

「さあ、そろそろ帰ろうぜ。」

てんでんから家まで徒歩5分。俺は家に戻った。

家に戻ってシャワーを浴びた。頭が痛かった。あがったあと俺はすぐに寝ることにした。

翌日。頭が…二日酔いだ。なかなかベットから起きれなかったが、無理矢理起きて、フラフラしたまま着替えて家を出た。

「あつたまが……。」

もう本当に頭が痛かった。でも、なんだか仕事をしている間に気が紛れて、いつの間にか頭痛は治っていた。

「さっ、これで…」

俺はピンキーを口に放り込んだ。そして、バッグを持ち、会社を出た。

「あ、卓也。」

「ちえっ、またお前か。」

「何よ、あつたから挨拶しただけじゃない。じゃ」

咲はここ最近ずっと会う。いつも同じ時間に同じ道で…。しかし、次の日からは咲を目にすることは無かった。

（たまに、愛菜の家にでも行くかな。）

俺は愛菜の家に遊びに行った。

「どーも。」

「どうしたの？急に」

「なんとなく。」

「ふうん」

俺はヤドカリのことを話した。

「へえ、まだ飼ってるんだ。」

そんなことを話しているうちにテレビに、緊急ニュースが入った。俺は特に気にしていなかった。

だって、俺には関係の無いことだもん。でも、殺人鬼の新しい犠牲者が出たということから

少しは耳を傾けた。しかし、俺はそのニュースを見た瞬間、体中が汗でびっしょりになっていた。

「被害者の名前は、森定咲。繰り返します。被害者の名前は、

森 定 咲 。
” ”

嘘だ。あの咲が？どうして…。息が乱れる。過呼吸状態だ。まさか、殺されるなんて。

愛菜も、かなりダメージを受けていた。

嘘だ…嘘だ……。

「うあ!？」

俺は知らないうちに眠っていた。目の前には、愛菜がいた。

「もう、振り向いたら横になってたから、気絶してるかと思っちゃった。

なんだ、寝てたのね。もう、驚かして。」

愛菜は少し笑った。

「…もう帰るわ。」

「いいの?」

「うん…じゃあな。」

卓也は家を出た。愛菜のあの笑いを思い出す。彼女も相当ショックを受けてるはずなのに。

翌日。咲を殺したあの指名手配犯は俺は許せなかった。

いくら、雄大の文句を言っていたって、同じ仲間だったから。

仕事も終わり、帰り。暗い夜道に見覚えのある顔見た。

あれは、指名手配犯？まさか…。でも、その隣には指名手配犯の用紙が。

顔を見比べる。100%と言って良いほど同じ顔。

気がついたら俺は指名手配犯に殴りかかっていた。

「ふざけんな！ふざけんなあ！」

「なんだてめえ！」

俺は刃物を手で払いのけた。気がつくとも手からは血が流れていた。

こんなことしなければ怪我しないのに。殺されるかもしれないのに。警察呼べば一発なのに。命は一つしかないのに…。

でも、仲間を奪った罪は重い。仲間を殺した罪は重い！

「咲の仇だ！俺がこの手で殺してやる！」

体中傷だらけになりながらも戦い続けた。

すると、近所を通りかかった人が警察に通報してくれた。

「何やってたの。」

「はい…」

注意されるのは普通だ。こんなまで指名手配犯に飛び掛るなんて。

「いつてえ！」

「もう、我慢して。」

俺は愛菜の家にいた。ただいま消毒中。

「もう、何であんなことしたのさあ。もう、バカ！心配したんだから…」

愛菜の目からは涙が溢れていた。

ごめん、愛菜ごめん。それしか言えなかった。

翌日、仕事は休みなので俺は愛菜の家に泊まっていた。

昼、愛菜は外の空気を吸ってくると言ったので家を出た。すると、

「犯人に飛び掛ったって本当ですか！？」

「なぜ犯人に飛び掛ったんですか！？」

マイクや大量のカメラを担いでたくさんの人が寄ってきた。マスク

ミだ。

「い、いやあああ！！」

愛菜は家の中に逃げた。

「質問に答えてください！」

「バン！」

愛菜はドアを閉めて二つ鍵をかった。

「もう、卓也！」

愛菜はどんどん足音を立てながら卓也の要る場所に行った。

卓也はマスコミが来たことに気がついたらしく顔を青ざめていた。

「ごめん…愛菜…ごめんよ…」

「もう！何であたしまでこんな目に合わなきゃならないの！全部卓也が悪いんだからね！」

もう…やだよ…」

最後のほうが少し涙声で聞きづらかった。

マスコミのカメラの音だけが響き渡っていた。

ああ、あんなことしなければ。

俺は愛菜の部屋まで謝りに行った。

「愛菜、本当にごめん。」

「来ないで……。一人にさせて……。」

そんなことを言うのなら……。俺は愛菜の部屋を出ていった。

下巻へ続く……

上巻 〱 真夜中の連続殺人 〱 (後書き)

次回予告！

愛菜と卓也はしばらく仲直りは出来なかった。しかし、愛菜の方から謝ろうと決意する。卓也の家に出かけようとして家を出ようとした瞬間、

同僚の龍介から電話が来る。

「もしもし？」

「愛菜か！？今、卓也は……」

下巻 〱 残酷 〱

乞うご期待！

下巻 〱残酷〱 (作成中!立ち入り禁止!KEEP OUT!)(前書き)

大変お待たせしました!!

半年振りの更新、一人ぼっち最終章!

ご覧あれ!!!!!!

下巻 〱残酷〱 （作成中！立ち入り禁止！KEEP OUT！）

卓也との関係はうまくいかず、
もう3ヶ月がたった。

時はバレンタインデー近くの2月。

周囲はバレンタインデーの話題で盛り上がる中、
愛菜だけは浮かない顔をしていた。

あげるのなら、卓也しかない。が、
あの関係ではあげれる空気ではない。

怒ったのはこっちなのに、

怖い目にあっただけで卓也のせいにして。

本当は卓也と一緒に居たいのに。

これから私は、どうしたらよいのだろうか。

私は今、

暗闇の中。煙のようなものが漂っている。

目の前に一人の男がいる。卓也だ。

暗い顔をしている。俯いている。

背を向け去っていった。

「待って！」

わたし、愛菜は追った。が、卓也に止まる気配は無い。

「待ってって！」

無視された。悲憤の涙が毀れてくる。

やがて、卓也は暗闇へ消えた。涙が止まらない。

悲痛な叫び声をあげ続け、四つんばいになり泣き続けていた。

「!？」

夢だった。ここ最近ずっとこの夢を見てしまう。
顔に手を当てた。汗がびっしょりだ。
着替え、用意し、家を出た。

「おいつす！」

会社の廊下で龍介に声をかけられた。

「最近遅刻ばつかじゃねえか。化粧やなんやに
時間掛けてんのかw？」

無性に腹が立つてうるさいな！と返してしまった。
いけないと思い、

「分かってます…。」

と一息置いてまた返した。

バッグを肩に掛け早足で通り過ぎた。

龍介は心配そうな顔で見送る。

自分の机に座ると、卓也と目が合った。

「……よっ」

いつものように、元気が無い。

私は微妙に口を開いた。多分、いや絶対に聞こえない。

何だか最近、ストレスがたまっている。

何か卓也に話しづらいし、相談する人なんていない。

今日はケーキバイキングでも行つて、ストレス発散してこようか。
私は麗華を誘った。

ちよつとしゃれた風景の店だ。

愛菜はものすごいスピードでケーキを平らげていつている。

「……いつも一人で来るんですか…?」

麗華は尋ねた。愛菜の食べっぷりに驚いているようだ。

「まあね。」

「卓也さんとの関係うまくいつているんですか?」

「……」

麗華はにやけた。

「…もしかして好きなんですか…?」

「そんなんじゃないって!」

麗華は微笑した。

「私、取りにいつてくる。」

「じゃ、私も。」

トングをつかんでケーキを取る。

「彼氏もないあんたなんか言われたくない。」

「彼氏…」

そのあと麗華はトングをこちらに向けて言った。

「やっぱ、彼氏だったんですか!」

「やめてよ、周りに人いるんだからさ…」

トレイを持ってテーブルに戻った。

「本当に、彼氏とかじゃないんだから。勘違いしないで。」

と言い、愛菜はケーキを一口で食べた。

「ツンデレですかw?」

と言い、麗華はケーキを一口で食べた。

「だから違うつてば。」

と言い、愛菜はまたケーキを一口で食べた。

下巻 〱残酷〱 （作成中！立ち入り禁止！KEEP OUT!）（後書き）

いかがだったでしょうか。

一人ぼっちはここで終わりますが、

まだまだいろいろな小説を掲載していくので
今後ともよろしく願います。

最後に、ここまで見てくださった方々、

小説家になろう！管理人様に

感謝申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2717/>

一人ぼっち of the final

2010年11月28日00時45分発行